

14・真夜中、ここに来るまでと、これからの話

『13・そのまま一日中セックスして、とろとろ対面座位員合わせする』から数時間後。
とある年の夏。七月三十一日（金）零時すぎ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は雨。今日も激しく振っている。気温は二十二度程度。
少し湿度は高いが、心地よい夏の昼間。

場所は、民宿内、弥映の部屋。

主人公と弥映は、あの後例によって一日中いちゃいちゃした。

お腹がすいたらご飯を食べて、眠くなったら寝て、触りなくなったらセックスして。
伯父伯母が戻ってきたらまた『仲のいい姉妹ごっこ』して。

そして、また一緒にお風呂に入って、今はまた一緒の布団で寝ている。

二人の体調はこうする間によくなり、おおむね回復した。

よくわからない治り方だが、そもそも軽い風邪だったのだろう。

だから、今日はとりあえずおとなしく早めに寝て。
また明日から、思う存分いちゃいちゃすればいい。

でも、何だかそれはもったいなくて、いつまでも話していたくて。

今も二人でくすくす笑いながら見つめ合って、とりとめのない話をしている。

それでも大分眠くなってきた頃、ふと、弥映が話し始めた。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【その後、繰り返し流す】

【0―10秒ほどまで流した後、音量が小さくなる】

【その後、トラック終了まで小さめの音量で流す】

●中央 至近距離

「しれっと。何でもなし事かのように切り出す。

だが、実際はすごくドキドキしている」

実はあたし、一昨日誕生日だったんだよね」

〈主人公〉

「え!?　いくつになったの!」

SE2　主人公が『がばっ!』と起き上がる音

【最初から最後まで流す】

主人公、それまでうとうとしていたが、弥映のその一言で、一気に目が覚める。

信じられない。

弥映と来たら、なぜ、そんな大切な事を今まで黙っていたのか!

そんな主人公を見て、弥映は、なんだかばつが悪そうに、申し訳なさそうに、もごもごと答える。

●中央　至近距離

「長めに間をあけてから。」

主人公との年齢差を実感するので、言い出しにくい。

なので、少し恥ずかしそうに。

だが内心『最初に聞くのそこなんだ……』とも思っている」
二十六歳……」

〈主人公〉

「ていうか、一昨日ってもう過ぎてるじゃん！　どうしよう!？」

●中央　至近距離

「少し笑って」

うん。過ぎちゃったけど。

「甘ったるく。もうすでに満たされている。主人公が慌ててくれているのが嬉しい」
でも、ずっと一緒にいてくれたし、プレゼントもくれたじゃん」

弥映、まるで気にしていないどころか、満足気に答える。

だが、主人公はそうはいかない。

知らなかったとはいえ、大切な恋人の誕生日をスルーしてしまうなんて。

許されない。重罪である。

もっと早く確認しておくべきだった。

……ああ。なんだか急に、目の前がくらくらしてきた……。

主人公、顔の左側を手で押さえ、まるで頭が痛い人のような仕草でたずねる。

〈主人公〉

「……あの。当日って私、何してたっけ……。

ちよつとシヨックすぎて、記憶飛んじやった……」

●中央 至近距離

「少し笑って。主人公があまりにもシヨックを受けているのが嬉しい。

だが、まさか、ここまで申し訳なさそうにしてくれるとは思っていなかった」
え？ 一昨日あたし達が何してたかって……。

「しれっと、にやにやと。『主人公だって覚えているでしょう？』という感じで」
セックス？」

〈主人公〉

「ああああああ……」

主人公、布団に崩れ落ちる。

自分から聞いておいて、さすがにこのレベルの記憶は残っておいても、それでも大ショックだ。

このまま布団にめり込んで、埋まりたい気分だ。

●中央 至近距離

「にこにここと。とても嬉しい。ショックを受けている主人公が可愛い。」

だが落ち込んでいるようなので、とりあえず、他にしてくれた事を話そうとする」
一緒にお風呂も入ったよね。

「少し間をあけてから。」

思い出すとうつとりしてしまう」

あんた一杯お世話してくれて、嬉しかったなあ」

〈主人公〉

「でも、そんなの、誕生日じゃなくてもするし！」

主人公、だんだん記憶が戻ってくる。

確かに一昨日は、個人的には素晴らしい日だった。

だが、恋人の誕生日にする事としては、ちょっとどうなのか。
いや、ちよつとどころか、明らかに色々足りないだろう。
本当に、セックスとお風呂位しかしていないじゃないか。

●中央 至近距離

「その言葉がとても嬉しい。

嬉しくて、からかいたくなってくる。

※マークまで、思い出したように。

本当は全部覚えているが、わざと今思い出したかのように振る舞う」
あー後（あと）あれされた。

すっごいおっぱい吸われて、一晩中襲われた」※

〈主人公〉

「あーっ……。もうダメだ……。一昨日の私、何をやってるの……」

主人公、いよいよ頭を抱える。

どうしよう？ どうやって挽回すべきか？

本気で泣き出したくなってきたが、弥映は本当に気にしていないようだ。
むしろ、ショックを受けてのたうち回る主人公を見て、嬉しそうにしている。

●中央 至近距離

「にやにやと嬉しそうに」

ふふ。今日とあんま変わんないね？」

〈主人公〉

「……………どうしよう。一生の不覚。

ちよつと、ヤバすぎて、脳が追いつかない……………。

ごめんね。弥映ちゃん。知らなかったとはいえ、何もできなくて。

……………そうだ！ 明日改めてお誕生日パーティーしよう？

私ね、こう見えて結構お金持ってるから。

お寿司とかケーキとか。明日、おいしいもの一杯食べようよ！」

もちろんお察しの通り、完全に嘘である。

もし多少でもお金を持っているなら、主人公は昨日靴の件で、あんなにも苦悩はしない。

だが祝いたい。祝わない選択肢はない。
だから主人公は考える。

——ここは、伯父と伯母に泣きついて、お金を貸してもらえないだろうか。
これまで一回も借りた事はない。

だから、一回位融通してくれるのではないだろうか。

これはもちろん、主人公の親がお金に厳しく、主人公自身もまた『借金』という概念を自分らしく感じていないからだ。

だが、この際プライドだの、自分らしさだの、己のパブリックイメージなんてものは気にしてられない。そんなものは捨てる。

弥映の方がずっと大事だ。

……問題は、お金を借りられた後だ。

このあたりの店など、主人公はあのショッピングセンターしか知らない。

参った、これも伯父さん伯母さん頼りか。情けない。

それに、店を見つけても、そこで終わりではない。
たとえ店があった所で、それが弥映好みかどうか。
そしてそこは、お祝いをするにふさわしい場所であるか……。
……考えだしたらきりがない。

主人公、思う。

ああ、せめて私の地元なら、まだやりようがあるのに。
そうだ、地元……。

地元。

しかし、主人公がそう思い詰めていると、弥映は、ゆっくりと首を振る、
それから目を細め、嬉しそうに、こちらを覗き込んでくる。

● 中央 至近距離

「静かに言う。もう満たされているので」
ううん。もう、十分すぎる位してくれたよ？

「少し間をあけてから。」

これから少し言いづらい話が始まるので、内心緊張している」
この話、したのはさ。

【なので他にも理由はあるが、まず、さらっと言っても問題ない方から伝える】

『今日誕生日』って言わなくても、あんたはすごい大事にしてくれて。

『この人、何でもない日でも、こんなにしてくれるんだなあ』って、感動したってのを
言いたかったの。

【少し間をあけてから】

大げさかもしれないけど……。

【少し間をあけてから】

『生きててよかったなあ』って、思ったっていうか……」

〈主人公〉

「弥映ちゃん……」

7秒ほど間。

主人公、弥映の言葉に胸がきゅーんとなるが、この話は納得できるようで、どこか腑に
落ちない点もある。

……だって、もしも誕生日の話がこれだけなら。

弥映は、たとえばもつと後になってから。

たとえば、誕生日からずいぶん経過して、主人公が『祝えなかった』と後悔しても遅すぎる頃になってから、この話をするような気がする。とにかく気を遣う人だからだ。

それでは、この話は、まだ別のどこかに繋がる話題なのだろうか。

それは、一体……。

主人公がそのように考えていると、弥映が再び話し出す。

●中央 至近距離

「しばらく間をあけてから。」

今度は、気軽にはできない話なので、緊張している。話す事が不安」後ね。

「大きく息を吸ってから。」

かなり緊張している」

もう一個。話していい？

「少し間をあけてから。」

かなり緊張しており、『』ごとに間をあけて、区切って話す」

あたしが。ここにきた理由。なんだけど」

〈主人公〉

「それ、は……」

主人公『来た……』と感ずる。

弥映がこの田舎に來た理由。

それは、これまでの主人公と弥映のやり取りにおいて、なんとなく避けていた話題だった。

当初弥映はそれを『旅行』と言った。

だから、主人公はそれを信じて、何も聞かない。

それ以上の理由など『ない』という事にする。

と、あたかも弥映を信頼しているかのような振りをして、それ以上は聞かずにいた。

だが、本当はずっと気になっていた。

だってもし、弥映が何らかの目的があつてここに來たなら。

この数日間、たとえば一人で出かけたり、誰かと会ったり。主人公と過ごす以外の事だつてしていたはずだ。

なのに、弥映は四六時中主人公という。

それは、少なくとも、この旅行にこれといった目的はない事の証拠にならないだろうか。

●中央 至近距離

「しばらく間をあけてから。

あくまで明るく、普通に、何でもない事かのように話したい。
しかし、そう思うあまり、まどろっこしい話し方になる」
って言っても、あんた頭いいからさ。

【少し間をあけてから。

少し申し訳なさそうに】

もう、何となくわかつちやってそうだけど」

〈主人公〉

「あの。もしかしたら、全然当たってないかもしれないけど。

弥映ちゃんって、もしかして……」

主人公、強い不安を感じながらも切り出しかける。

『もしかして、何かすごく嫌な事があったの?』

『家にいたくなくなるような事があったの？』
そう聞こうとする。

だが、その前に弥映が小さく頷き、また口を開く。
自分から話すつもりのようなうだ。

● 中央 至近距離

「※マークまで、内心緊張や不安を感じつつ、できるだけ落ち着いて、
いつも通り、静かに話そうとする」
うん。

【少し間をあけてから】
多分、あんたが想像してる通りだよ。

【少し間をあけてから】
少し申し訳なさそうに」
逃げてきたんだ。

仕事とか、人間関係とかで、全部嫌になって。

【声のトーンが下がる】
主人公にこんな話をする事が、とても申し訳ない」

ここには、人生辞めてやるつもりで来たの」※

〈主人公〉

「……………」

主人公、言葉を失う。

薄々わかつていた事だが、こうして弥映の口から言われると、息ができなくなりそうになる。

だって、考えるまでもない。

『人生辞めてやる』は婉曲表現だ。

それが意味する所は、つまり——……。

●中央 至近距離

「しばらく間をあけてから。

あくまで明るく、普通に、何でもない事かのように話したい」
で、ほんと。

「だが、思うようにいかない。声が震える。

どれだけ明るく話そうとしても、その内容が暗すぎて、誤魔化しきれないと感じる。

※マークまで、だんだん、声のトーンが下がってしまおう」
仕事辞めて。

【申し訳なさそうに。

主人公にこんな話を話すが、とても申し訳ない】

誕生日の前に。適当なところで、死んじゃう気、だったんだけど」※

7秒ほど間。

弥映、やはり話しづらいのか、少しの間、沈黙が流れる。

●中央 至近距離

「だが思い返すと、自分の行動は『暗い』『悲しい』というよりは『無計画』『残念』という感じである事を思い出す。

なので、語り口はそこまで深刻にならない」

いざ来たら、知らないところ、普通に怖いし。

そしたら靴まで折れて、

【少し間をあけてから。

苦笑して。思い出すと少し泣きそうになる】

もう、どうしたらいいかわなくなっちゃって。 ※

【だがここで、少し声が明るくなる。胸がときめく。ここで主人公が登場するので、しかし、その時主人公が何をしていたかと思いつくと、それはちよつと格好悪いので、一度言葉に詰まる】
そしたらあんたが……」

妙な沈黙が流れる。

〈主人公〉

「……………」

弥映、そこで言葉を止める。

主人公、続きが気になり『それで?』と続きを促そうとする。

だが、次の瞬間、なぜ弥映が今、言葉に詰まったのかを理解した。

だって、その時、主人公は……。

あまりにもひどい。

話はこんなに真面目なところなのに、自分は一体何をしているのだろう。

我ながらがっかりである。

●中央 至近距離

「少し笑って。でも、さすがに蒸し返すのはしつこいので、濁す。

『あんな感じで』とは『川原でアダルト雑誌を読んでいて』という意味」
まあ、あんな感じで。

「しかし弥映は、あの日声をかけるまで、主人公が何をしていたのかはわからなかった。
なので、結果的に話が前後する」
気づいたら声かけてて。

「※マークまで、だんだん、ぼそぼそとした、恥ずかしそうな話し方になる」
だから最初は。

あんたの事『変な人に会わないように、見てあげてる』みたいな気持ちだったんだけど。
「少し恥ずかしそうに、ぼそっと。

思い出すと胸がときめいてしまう」
あんた優しいし。

「少し間をあけてから。

さらにぼそぼそ、もごもごし始める。
思い出すと胸がときめいてしまう」

靴まで、くれるし。

なんか『もつと話したいなあ』って思っちゃって。
そしたら……」※

〈主人公〉

「またえっちな本読んでたのかあ……。

もうやだ……私……」

主人公、今度は言わずにはいられなかった。

ので、言ってしまった。

それは話が少し明るくなったからだが、それ以上に自分自身に呆れてしまったからだ。

……こうして振り返ると、ひどい話である。

弥映はいつも、純粹な善意や好意のもと、主人公に声をかけてくれていた。
なのに、主人公と来たら……。

主人公、己のあまりの残念さに、がっくりとうなだれる。

対する弥映は、そんな主人公を見ているうちに笑顔に戻っていた。

普段のような調子で話せるようになってくる。

●中央 至近距離

「少し笑って。」

ここから、声が少し明るくなり、普段の口調に戻っていく」
はい。そお。またえっちな本読んでてさ？

「少し間をあけてから。」

『そんなしてみたい』は『そんなにセックスをしてみたい』の略」
だから『この子、そんなしてみたいのかなあ？』って思ってた。

「少し間をあけてから。」

恥ずかしそうにぼつぼつと。しかし、結果的に、ずいぶん奇妙な話になってしまった」
そしたらあたしも『そう言えば、死ぬ前に一回位セックスしてみたかったなあ』って思っちゃって。

「しばらく間をあけてから。」

なんだかばつが悪い」

そしたらまあ。

『『したら』は『セックスしたら』の略』

……一回したら、どんどん好きになっちゃって。

【しばらく間をあけてから。
なんだかばつが悪い】

今日（こんにち）に至る、訳ですけども……」

〈主人公〉

「……あの」

●中央 至近距離

【きよんととして。主人公が何を言いたいのかわからず、続きを促す】
うん？」

だが、主人公、ここで再び口を挟まずにはいられなくなる。
それは……。

〈主人公〉

「……私、弥映ちゃんがちろすぎて心配になってきたよ。
今の話、どこをどう切ってもおかしいんだけど」

弥映の行動が、あまりにめちやくちやで、その上引っかかりやすすぎて、心配になったからである。

さらにこの『どこをどう切ってもおかしい物語』の相手役が自分なのが、実に情けない。わかっているつもりではいたが、これで飢えた獣である。

ダイジェストにした途端、主人公は、完全に性の事しか考えてない、欲望むき出し人間になってしまった。

しかも、フルバージョンに直したところで、その表現で別に間違っていないという事実は変わらないのが辛い。

……でも、弥映ちゃんは、そんな私でも……。

主人公、そう思うと、とても嬉しくなる。

それとともに、弥映がそれだけ思い詰めて、傷ついていた事がよくわかって、胸が痛くなる。

弥映は、あつけらかんと話すが……。

その行動は、安定した精神状態で考える事、する事ではない。

つまり弥映は、全てに対して投げやりになっていたから、その日出会ったばかりの主人公とセックスしてみようと思ったのだ。

それだけではない。

弥映は、そんな精神状態にあつたせいで、主人公にとっては当たり前前の、誰にでもするような親切をされただけで……。

主人公の事を、実際以上に魅力的に感じてしまったとも、考えられる。

だから主人公は、これを掘り下げ『やはり、弥映の自分への気持ちは恋愛感情ではない』と考える事ができる。

これについて指摘して、弥映に考え直してもらふ事もできる。

でも、しない。

わざわざそんな事をしたがるのは、自分の心の弱さだと、今ははっきりわかるからだ。主人公は、もう二度と弥映を疑って、その根拠を示しては『そんな事ないよ』と否定してもらったり、慰めの言葉をもらいに行ったりしない。

弥映は今確かに『主人公を好きになった』と言ってくれた。だから、それを信じるのだ。

主人公、思う。

それに……自分はこの数日、弥映とずいぶん似た行動をとった人間を一人知っている。
それは……。

●中央 至近距離

「少しむきになって。

たとえ主人公であっても、主人公を悪く言われるのが面白くない」
ええ？ それは。あたしのセリフだし。

【※マークまで、かわいく怒る】

あんたほんと、あんなのダメだよ？
会ったばかりの人としちやうとかさあ。

どこに悪い人がいるかわかんないんだから」※

そう。

主人公自身の事である。

主人公、内心頭を抱えつつも、反論する。

〈主人公〉

「そのセリフも、そっくりそのままお返しするよ……。
弥映ちゃんのバカ。

なんでそんな、色々投げやりになってたからって、その場の雰囲気で初体験してんの。
そんなの。あの、例の作家さんの本のキャラでも少数派だったよ。
……でもさ。本当はまあ、そんなの、当人の自由だとは思うけど。
私が制限していい事じゃないと思ってるけど。
したいと思ったら、良識の範囲でしたらいいと、私は思うけどさ。
でも弥映ちゃんはダメ。私の彼女だから。
それに私は『会ったばかりの人』とセックスしたんじゃないし。
『付き合ってる人』としたの。
だからいいの。私は」

● 中央 至近距離

「主人公の言っている事がめちゃくちゃなので驚く。
でも内心『自分の彼女だから〇〇をするのはダメ』なんて
理不尽な命令をされるのさえ、ちよっと嬉しい。
それに、まったく同じ事が自分にも言える事に気づく」
ええ……!?

それなら、あたしだって同じだし。

あんと『お付き合いたいよね』って約束してからの、恋人セックスしかしてないし！
【まだ色々言いたい事がある】

それに。

【少し間をあけてから。

だが、これ以上はあまり意味がない事に気づく】

……いや、やめようこれ。

【少し間をあけてから】

だって、あたし達」

主人公、この時点で弥映が何を言いたいのかわかってしまう。
そう、自分達は……。

〈主人公〉

「うん。どこまで行っても、同罪だねえ……。

同罪っていうか……お互い様？」

● 中央 至近距離

「がつくりと。でも、少し笑ってしまふ。

反論の余地もない感じで」

そう……お互い様だよね……」

〈主人公〉

「まったくだ。はああ……」

主人公と弥映、仲良くうなだれる。

でも、間拔けな話だが、それがなんだか幸せでもある。

確かにお互い指摘する通り、自分達のした事は、決して推奨される事ではない。

というか、絶対にやめた方がいい。

だが、少なくともお互いは、これに関して相手に何かを言う権利はないという事が、はっきりわかってしまった。

また、それによつて、二人は今、とても幸せな気持ちでいる。

結果論なのはわかっている。

だが、この結果に至ったという事は……お互いだけは、この行為を許していいという事にならないだろうか。

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。」

話がそれてきたので、自分が本来話したかった方向に戻そうとする」
だからまあ、その、ね？　ちよつと話戻るけど。

【少し間をあけてから】

あたしこういう、ヘラヘラした感じだから。

【少し間をあけてから。

※マークまで、だんだんぼそぼそと、ぼつぼつとした語り口になる】
誤解。っていうのかな。

【少し間をあけてから】

実際と違うイメージ、持たれやすいんだけど。

【少し間をあけてから】

本当は全然、人付き合いも、友達作りも下手で……。 ※

【少し間をあけてから。

少し真剣な声になって。改めて主人公に自分の気持ちを伝えたい】
この何日か、本当に初めてだったの。

『大好きだな』って思う人とずっと一緒に、毎日楽しくて。

しかも、こんなに大事にしてもらえるなんて。

【少し間をあけてから。

恥ずかしそうに】

初めてで、嬉しかったの……。

【少し間をあけてから】

だから……」

弥映、ここで身体を起こし、改めて主人公にきちんと向き直って話す。

SE3 弥映が身体を起こす音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「少し間をあけて。

大きく息を吸ってから、真剣に告白する」
好きです。

【少し間をあけてから。

少し声が震える】

あんたのおかげで、あたし、もう一度頑張ろうって思えた。

【少し間をあけて】

大きく息を吸ってから。

声が震える。不安そうに、自信なさそうに】

順番、滅茶苦茶になっちゃったけど……。

【それでも、真剣に、はつきり伝える。

ここは二人称が『あなた』になる】

あなたと、これからも本気で付き合いしたいです。

【少し間をあけてから。

声が震える。

※マークまで、不安そうに、自信なさそうに】

多分、遠距離だと思うし。

あたしなんかが。

あんたみたいな素敵な子と釣り合うのか、心配だけど……。

※

【それでも、はつきり伝える】

あたし、頑張るから。

【ドキドキと】

これからも……。」

〈主人公〉

「……弥映ちゃん」

●中央 至近距離

「甘えた声で。少し不安そうに」
うん？」

主人公、そこで、小さく弥映に向かって手を伸ばす。

ここで弥映にだけ誓わせているようでは、自分らしくないと思った。
だから、もっと手を伸ばす。

それから、昨日、弥映にされて、とても嬉しかった事を、今度は自分がしてみる。

主人公、両手を広げ、弥映に、もっとこちらへ来るように促す。

〈主人公〉

「おいで♥」

●中央 至近距離

「甘えた声で。すごく嬉しい。」

これが『OK』のサインだと理解する」

あ……♡」

二人、そのまま抱き合う。

SE4 主人公と弥映が抱き合う音

【最初から最後まで流す】

SE5 主人公が弥映の頭を撫でる音

【最初から最後まで流す】

主人公、弥映をぎゅっと抱きしめて、頭を撫でる。
それから、一度離れて、向き直って伝える。

〈主人公〉

「弥映ちゃん。私も同じ気持ちだよ。

弥映ちゃんが大好き。

弥映ちゃんと真剣にお付き合いたい。

ううん。ずっと、真剣な気持ちだったけど……。

改めて言うね。

この民宿での毎日が終わっても、私と一緒にいて下さい。

私、まだまだ足りないところたくさんあるけど……。

絶対、あなたを幸せにする人になるから。

だから。これからの事、一緒に沢山話しながら、一緒に頑張って行こうよ。

……私、弥映ちゃんと一緒なら、きっとどんな事でも頑張れる気がする」

話し終わると、弥映がまた涙ぐんでいた。

それを見て、主人公の胸はいっぱいになる。

自分の素直な気持ちが届いただけではなくて、それを伝えただけで、こんなに喜んでもらえる。

こんなに嬉しい事がこの世にあるんだと、初めて知った。

「涙ぐんで」

うん……。うん！

一緒にいよう。二人で、一杯幸せになろう？

「ゆっくり、そっとキスをする」

ちゅ。

「※2回※ キスをする。」

ゆっくりした、幸せで甘々なキス」

ちゅ。ちゅっ♥

「真剣に、涙ぐんで。ものすごく嬉しい。喜び一杯で」
大好き」

〈主人公〉

「私も弥映ちゃん、だーっーい好き♥」

●中央 至近距離

「※マークまで、涙ぐんで、心底幸せそうに」

へへへ♥

「少し間をあけてから」

あたし、今だったら、何（なん）でもできそう………♥」※

〈主人公〉

「私も♥」

主人公と弥映、そのまま、しっかりと抱き合う。

主人公、再び弥映の髪の毛を撫でる。

SE 6 主人公が弥映の頭を撫でる音2

【最初から最後まで流す】

7秒ほど沈黙。

主人公と弥映、しばらくそのまま、幸せな気持ちで抱き合っている。
……だが、話はここで終わりではない。

主人公もまた、今夜、弥映に話さなくてはいけない事があるのだ。

そう。

『地元』の事である。

主人公はこの件について、かねてから弥映に聞きたい事があった。

弥映が指用のコンドームについて調べていた夜、主人公もまた調べ物をしていたのだ。

〈主人公〉

「……あとね。弥映ちゃん。私、一つ確認したい事があって」

弥映、主人公の言葉を受け、左耳側から話しかける。

●左 至近距離

「きよとんとして」

んー？

【少し間をあけてから】

何、確認したい事って。

【何を確認したいのか、まったく見当もつかない】

まだなんかあったっけ」

主人公、そのまま、一度身体を離す。

当然、弥映は残念そうにしている。

弥映が盛り上がって密着してきたところを、主人公が重要任務のため、仕方なく離れる。
……前にもこんな事があった気がする。
気持ちとしては、大変忍びない。
だが、これは大切な話なのだ。

〈主人公〉

「うん。ある。すごく大事なやつが。

……弥映ちゃんさ。初めて会った日」

主人公、ドキドキしながら切り出すが、弥映はピンと来ていないようだ。
きょんとした表情で主人公の話を聞いている。

●中央 至近距離

「少し不安そうに、でも素直に相槌を打つ。

主人公が何を言いたいのかは、まだわからない」
うん」

〈主人公〉

『昼に適当に電車乗って、適当に夕方ここに着いた』って言ったよね」

●中央 至近距離

「少し不安そうに、でも、素直に相槌を打つ。

主人公が何を言いたいのかはまだわからない」

うん。言ったよ。

ここに来た日は、昼に適当に電車乗って。

夕方に適当に降りたら着いたの」

〈主人公〉

「ここ、昼から適当に電車乗って、夕方に適当に降りたら来れるようなところじゃないんだよね。

私もちよつと調べただけど……。

昼からアクセスできて、かつ、私と弥映ちゃんが会った時間までにここの駅に到着できるところは相当限られてる。

具体的には、一個の街しかない」

●中央 至近距離

「素直に相槌を打つ。

『そうかもしれないけど、それが何か?』という感じで。

主人公が何を言いたいのかはまだわからない」

うん」

5秒ほど沈黙。

弥映、主人公がここまで話しても、なお意図を理解できていない。

なので、これでもそのまましばらくきよんとしていたが……。

数秒後に、ようやく話を理解したようだ。

だが、その衝撃により、ますます思考能力が低下してしまったらしい。

今度はあわあわと混乱している。

●中央 至近距離

「しばらく間をあけてから。

呆然として。主人公の言いたい事がわかってきたからこそ、さらに混乱している」

えっと。つまり?」

〈主人公〉

「つまり。私達、思ったより近所に住んでると思う……。少なくとも遠距離ってほど遠距離には、ならない」

●中央 至近距離

「【驚きすぎて、かえって棒読みっぽくなる】
え、嘘」

〈主人公〉

「マジマジ。本当の本当」

5秒ほど間。

しばらく沈黙が続く。

弥映、心の整理がつかず、ぽかーんとしている。

●中央 至近距離

「混乱している」

いやいやいや。え？」

5秒ほど間。

再び沈黙が続く。

弥映、心の整理がつかない。完全にフリーズしている。

それでもこのままではいけないと思ったのだろう。

そして、大きな期待もあるのだろう。

頭を抱えたまま、主人公にたずねる。

●中央 至近距離

「おずおずと切り出す」

えっと。あの」

〈主人公〉

「うん」

主人公、大きく頷いて、弥映の言葉を待つ。

●中央 至近距離

「おそろおそろ尋ねる」

ちよつと、ナンパみたいな事聞くけど」

〈主人公〉

「うん」

主人公、思わず笑ってしまう。

弥映のこわごわとした声と、不安そうな表情に対して、『ナンパ』という軽い言葉のギャップは、正直面白い。

面白がっている場合ではないが……。

先ほど同様、真面目な場面でもどこかユーモラスになってしまうのは、自分達っぽいと、主人公は思う。

●中央 至近距離

「おそろおそろ尋ねる」
どこ、住んでるの？」

来た。

主人公、百パーセントの確証はないながらも、それが、弥映にとっても耳慣れた地名の
はずであると思いつながら、答える。

〈主人公〉

「〇〇市××区」

●中央 至近距離

「変な声になる。信じられない」

……ええ？」

どうやら、予想は当たったらしい。

〈主人公〉

「ちなみに最寄り△△駅」

ここまで聞いた弥映は、大きく目を見開いて、ぽかんと口も開けて。
この数日間で、もっとも愉快的表情を浮かべている。

●中央 至近距離

「【変な声になる。信じられない】
あ」

〈主人公〉

「知ってる地名でしょ？」

主人公、ここまでくると楽しくなってきた、にやにや確認する。

この反応からして、もう間違いないだろう。

この事実、弥映が喜んでくれる事が嬉しい。

この民宿を離れても、一緒にいられる事が嬉しい。

●中央 至近距離

「【声が震える。嬉しくて泣きそう。】

※マークまで、だんだん実感がわいてくる」
近いじゃん。

その気になれば、歩いて行ける距離じゃん……！
ほん、とに？　ほんとにほんとにほんと？」※

〈主人公〉

「本当に本当に本当に！」

●中央　至近距離

「【※マークまで、声が震える。嬉しくて泣きそう】
あたし達、遠恋（えんれん）しなくていいの？
これからも。」

会いたいと思ったら、いつでも会えるの……？」※

〈主人公〉

「そうだよ♡」

主人公、弥映の顔を見つめて、もう一度大きくうなずく。

すると、みるみるうちに、弥映の目が涙で満たされていく。
それを見ていたら、主人公は、今まで感じた事がないほど優しい気持ちになる。
この可愛い人を、ずっと支えたい。
心からそう思った。

●中央 至近距離

「嬉しくて泣いてしまう。」

※マークまで、涙声で話す】
嘘みたい。

【少し間をあけてから】

こんな事って、あるんだね。

【少し間をあけてから】

良かった。ほんとに、良かった……！ ※

☆【※10秒※ 泣く。まるで、小さな子のように泣いてしまう】☆

★ うえーん……！ ううつ。ぐすつ、ぐすつ、ぐすつ……！ ううつ……！

【少し間をあけてから。

呼吸を落ち着かせようとする】

はあ……すう。はあ……。

「しばらく間をあけてから。

呼吸が落ち着いてから話す。

※マークまで、ゆっくり、涙声ながらも、すごく幸せそうに」
あのね。

これまでずっと。あんたにしてもらえばっかりだったけど。

これからは。あたしが一番近くにいて。

あんたを一番、幸せにするからね……♡」※

〈主人公〉

「ふふふ。それは、私のセリフだよ。弥映ちゃん♡」

主人公、弥映を見つめて微笑む。

それを見て、弥映も笑う。

●中央 至近距離

「嬉しくて泣いてしまう。

※マークまで、涙声で話す」

あはっ♡ セリフ、被っちゃった？

【甘く、うっとり】

あたし達、本当に似た者同士だね。

【少し間をあけてから】

へへ……じゃあ、改めて」※

弥映、主人公の左耳にささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

【ひそひそと、嬉しそうにささやく】

これからも、よろしくね♥」

ここでフェードアウトして終了。